



Title	新史観の提唱
Author(s)	作田, 莊一
Citation	懷徳. 1937, 15, p. 28-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88974
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新史觀の提唱

作田莊一

一

今まで史觀として最も廣く影響を及ぼしてゐるものは唯物史觀であらう。この史觀を以て歴史を吟味するとき、都合よく解釋される場合も多々あるが、しかしこれではどうしても歴史が解らない場合も少くない。殊に自分は明治維新の由來と進展とを考へるときに、唯物史觀の無力なることを確めた。こゝでは新しい唯心史觀を以てしなければ歴史解釋が出来ない。以下暫らく唯物史觀を吟味して後に、唯物史觀を超えて立つ所の唯心史觀に就て略説を試みたい。

史觀即ち歴史觀と云ふは歴史決定觀の意味である。歴史の進行を決定する力は何であるかを吟味して、それが物質力であると見るのが唯物史觀であり、それが精神力であると見るのが唯心史觀である。歴史の進行を物質力によつて解釋せる人は二三に止まらないが、その中でマルクス・エンゲルスの立説が最も整つてゐるので、唯物史觀と云へばマルキシズムの特徴と考へられ、今まで廣く影響を及ぼしてゐるものはその唯物史觀である。この唯物史觀は、以前に歴史の進行を精神力に歸する諸説、例

へば偉人が歴史を導くとか、宗教・藝術・學問・技術等の精神文化が歴史を進めると言ふが如き説を否定して、歴史は物質的生産力を基調として變轉すると考へるのである。この見解は一面に於て當つてゐる。蓋し偉人は一人の力に於て偉大なるのではなく、世間的威力又は勢力を表現する所に偉大となる。もとよりその表現者となり得る素質を持つ人は凡人ではないが、世人が偉人の指令によつて動く云ふことは、偉人を通して世間的威力又は勢力が世人を動かすのである。歴史の決定力はこの威力又は勢力に外ならぬ。斯く見るとき、何故に一の偉人が成功し他の偉人が失敗するかが解し得られる。また宗教・藝術・學問・技術等が歴史の内容を形成することは勿論であり、人間の創造力の發動する所に歴史が進行することは言ふまでもない。歴史は意志活動の經歷であり、動物以下には歴史なく、精神力を發揮せしめる人間のみに歴史が存する。しかし歴史觀に於て、何が歴史の進行を決定するかと言ふことは、歴史が精神力の産果であると言ふことよりも別の事を考へてゐるのである。こゝに歴史と言ふは國民生活の歴史(又は國の歴史)を指し、發生後日尙ほ淺き世界生活の歴史(又は世界史)をば暫らく除外して置く。國民歴史が種々の精神力が生み出す文化を内容とすることは勿論であるが、歴史の進行を全面的に動かす力は、宗教・藝術・學問・技術などの如き部分的精神力ではない。歴史を全面的に決定するものは神靈の力であるとする一種の唯心史觀も一概に否定し難い。しかしそれは形而上説であつて、今吾人が問題とする歴史觀の問題ではない。

歴史の進行を決定する力は、何かの世間的威力又は勢力である。その力の動く所に歴史が一定の内容を形成しながら進行する。その内容は種々多様であるが、それらは今問題から除かれる。歴史観として唯物観をとるか唯心観をとるか云ふ問題は、それらの内容を全面的に決定し形成する力は何ぞやと云ふことにある。

二

歴史は物質力によつて決定されると見るのが唯物史観であるが、然らばその物質力とは何であるか。マルキシズムではその物質力を物質的生産力であると言ふ。然るにこの物質的生産力の何たるかに就ては、マルクス・エンゲルスも明言して居ないし、後の祖述者達の間にも色々の解釋が行はれて、今に定説がない。肝心な決定力の正體が不明であるから、唯物史観の意味も明瞭でない。唯だ多くの人々は漫然と、經濟事情が經濟外の政治や文化などを左右すると考へてゐる。それでも漫然たる意味に於て歴史を説明し得る場合が少くない。しかしそれだけでは歴史解釋の鍵とはならない。

唯物史観に於ける物質的生産力の正體如何に就ての喧しい論争に今觸れる餘裕を持たない。こゝでは自分の解釋によつて唯物史観を採るべきや否やを吟味して見たい。物質的生産力を解して外界に在る地物の生産性となすことは（かゝる見解を主張する有力なマルキシストもあるが）明かに間違つてゐる。何となれば、外界の物質狀態如何が人間生活を規定することはあつても決定する力のないこと

は、同様の物質に恵まれながらも歴史に於て雲泥の相違を見ることが稀でないからである。又外界の物質の下に立たぬ所に人間の歴史が成立するのであつて、人間の運命が外界地物の決定に委ねられるならば、そこには生物としての人類の變遷はあつても、人間の歴史はない筈である。物質的生産力と言ふは、外界に在る物質ではなく、人間生活の側に在り、世間生活の中に在つて、我等の生活資料を形成する所の物質的生産力でなければならぬ。斯の如き物質性の力が他の非物質性のものを左右する所に歴史が進行すると見るとき、唯物的なる歴史決定觀が成立し得る。

然らば世間生活の中に在る物質的生産力が如何に歴史を決定するか。この時、『物質』と言ふものを唯だ礦物・植物・動物などの『地物』と解するのでは、たとへ我等の生活内容に收められてゐるものであつても、それは人間生活を決定する力とはなり得ない。そこで『物質性』の意味を別の方途から尋ねる必要が起つて来る。西洋の社會科學では、よく『自然及び社會の物質性』と言ふことを述べてゐる。『自然』と『社會』とを、従つてまた『自然科學』と『社會科學』とを對稱させることは、社會科學者の通例とする所である。然るにこの表現は歐羅巴の近代科學の沿革によるものであつて、國語としては意味をなさない。西洋の近代科學は地物自然科學から隆起した。その時にこの科學を單に自然科學と叫んだ。後にその研究法を人間生活の研究に應用したが、その頃、人間生活として特に注目されたものは近世に到つて成熟した社會生活であつたから、そこで自然科學に對するものを社會科學

と呼ぶやうになつた。然るにこの社會科學は地物自然科學に倣つて原因結果の關係を探究する科學であり、自然法則を求めるものであり、社會科學は要するに社會自然科學に外ならなかつた。この時に、地物自然科學を單に自然科學と呼び、社會自然科學を單に社會科學と呼び、同様に『自然』と『社會』とを對稱せしめた。従つて西洋思想にて『自然』と言へば『地物』と解すべく、また社會も、西洋の社會科學に於ては、原因結果の關係を包める自然性のものと考へられる。自然性と言ふは、一定の原因から必至的に運動を起して結果に落着するものを指し、これと對稱されるものは、一定の目的から自由的に活動を起して成績に到達する意志性のものである。地物も社會も自然性のものであることは同様である。そこで西洋的表現に於ては、『自然及び社會の物質性』と言はれるが、これを正しい國語を以て『地物及び社會の自然性』と表現するならば、その意味がよく通ずるのである。西洋的表現にて『物質的』又は『物的』と言ふときは、正しい國語では『自然的』と言ふ方が當つてゐる。

以上述べた用語によつて唯物史觀に謂ふ所の『物質的生産力』の語を解するならば、それは『物質的生産に用ひられる諸力』の意味であると同時に、この諸力が社會關係の中に存立する有様は、一定の意志によつて計畫的に準備されるのでなく、社會的自然性の作用によつて無計畫的に形成されることを意味する。勿論、一々の生産力はこれを所有する者によつて計畫的に作出されるが、一々の生産力は直ちに生産を始めることなく、一社會の生産に参加する生産諸力はそれらの結合によつて始めて

動き出すのであり、この諸力の社會的結合は社會に於て自然に行はれるのである。そこで『物質的生產力』の動きは社會的自然性の動きであり、その物質力が動くときに歴史が進行し變轉する。生産力が生産關係の中に在つて動くから、社會の經濟的土臺が社會全般を動かすと見る所に物質的と言ひ得られるも、本質的には經濟的要素を内容とする社會的自然力——又は社會勢力——が社會生活を決定すると見るべきであり、これが唯物史觀の要旨である。社會と經濟とは數々同じ意味に解せられるほどに密接なる關係があり、一を離れて他を考へ得ないほどに史的發展の關係がある。そこで唯物史觀と言ふは、經濟を内容とする社會勢力——又は無意識的社會力が歴史の進行を決定すると言ふことになる。

以上の如く解するとき、唯物史觀にも或限度までは眞實性が具はり、歴史解釋が出來得るのである。即ち歴史の進行が社會勢力によつて決定されると見て、史實がよく理解されるのである。この場合に大切なことは、歴史の内容を形成する發起力と歴史の方向を左右する決定力とを區別することである。精神文化の創造は勿論精神力の作用であり、これは發起力に屬する。史觀としての決定力は方向付けること、方づけることである。その力は精神力とは云へない社會自然力である場合が承認されるのである。マルキシズムでは如上の發起力と決定との區別を明かにしてゐないから、唯物史觀反對者から數々歴史に就て精神力を無視すると云ふやうな謬つた批難を蒙るのである。發起力と決定力とを區別しなければ、唯物史觀は成立たない。

三

唯物史觀は一應は自然史觀として成立し得る。即ち社會的自然力が歴史の進行を決定すると見るとき、それは畢竟、自然的運命觀の歴史觀となる。自然的と云つても勿論地物的自然性ではなく、人間の歴史が無計畫的に自然必定的に進行すると云ふのである。この歴史觀にて歴史の解釋が出來得る場合が多々ある。この歴史觀は必しも捨て去らるべきものではない。しかし我等の歴史は果して唯物史觀を以て解釋し盡されるであらうか。否な然うでない。

我等の國民生活は、近世に及んで、國家生活と社會生活との二重組織となつた。國家生活に於ては、全體意志たる國家意志が計畫的に國民生活の維持及び進展に力めるが、社會生活は個人生活の關聯に止まる集團生活に外ならないから、こゝでは社會的自然力が諸個人の意志を超えて、個人の好むと否とに拘らず、一定の方向をとつて動き、個人の目的實現を左右する。斯の如く社會的勢力の動く所に唯物史觀が成立し得る。然るに國民歴史は社會生活史に止まらず、その外に國家生活史がある。國家歴史は明かに國家威力の動く所に進行する。こゝでは謂ゆる物質力が支配的でなく、精神力が決定力を持つ。この場合に問題となるのは、國民生活に於ては國家威力と社會勢力とは、孰れが優越的地位に立つかと言ふことである。若し社會勢力（社會的自然力）が國家威力を抑へてゐるならば、國民歴史の解釋は大體に於て唯物史觀によらなければならぬ。これと異り、國家威力（國家意志力）が社會勢力の

上に立つてこれを制してゐるならば、國民歴史は大筋に於て唯心史觀を以て解釋しなければ眞相を認めることが出来ない。然るに唯物史觀を執る人々は、初めから國家意志力をば社會自然力の中に包括せしめて、その一構成成分と見てゐる。彼等も國家意志力が他の團體意志力よりも一段と強大であることを認めてゐるが、しかし國家は畢竟、社會的階級の一方が掌握する強壓裝置に過ぎないと考へてゐるから、國家意志は常に社會勢力の下に立つ第二次的意義を持つとなす。唯物史觀に固着するものはかゝる見地に立つのである。然るにこの前提となれる國家の地位こそ、歴史の解釋に就て極めて重大なる意義を有する。マルキシズムの認識論は階級主義の認識論であり、無產階級意志から認定すると言ふ一種獨特の立場に立つものである。この立場から見れば、國家は階級支配の爲に存立する強壓機構に過ぎないと見られる。この認識觀では、國家は甚だ尊重に値しない第二義的存在に止まる。唯物史觀の成否如何は國家を如何に見るかの見解によつて定まり、それはまた究竟的には世間生活、特に國民生活を如何に見るかの認識論上の立場如何によつて定まるのである。

四

吾人は從來の認識論と異つた見解を持つ。世間生活に面してその認識を求める場合には、他の場合と異り、世間生活に於ける活動主體又は活動體系を異にする毎にそれ／＼に適應する認識主體に即して觀察し思索しなければ、眞實の認識を求めることは出来ない。個人生活を見るときは個人意志、階

級生活を見るときは階級意志、國民生活を見るときは國民意志（又は國の心）を以てしなければ眞理を求めるとは出来ない。從來眞理を求めるに熱注し若くは熱注する如く装つてゐる者の多くは、徒らに眞理を追驅けるのみにて、如何にして眞理に到達し得るかの道に就ては甚だ粗漏であつた。甚しきは、個人意志又は階級意志の立場から國民生活をも見ようとする人々も少くない。それでは國民生活の全面及び内面を見ることがの出来よう筈がない。かくて彼等の眼界には國民生活が正しく現はれない。従つてまた國家の眞相が眼底に映じない。

國の心を以て國の生活を見るとき、始めて國の生活に就て眞の認識が求め得られる。その時に我等は、國民生活（國の生活）の中に國家生活と社會生活との二重構造を見渡し、更に國家を牽制する社會と社會を統制する國家との關係を看取する。國家は飽くまでも獨立の存在であつて、決して社會の一内容をなすものではない。唯だ歴史進行の過程に於て、時としては社會勢力が國家を牽制する方が一層強くなることもあり、また時としては國家威力が社會を統制する方が一層強くなることもある。前の場合には如何にも國家が社會に囚へられたやうに見える。然う見えるときに唯物史觀が眞實らしく考へられる。また實際に於て唯物史觀的解釋が當つて来る。然るに後の場合には、單に國家の眞面目が現はれるのみでなく、國家意志が無意識的社會の中に滲透して國民生活全般を意識的計畫的ならしめる。この時に國民歴史の進行は精神力によつて決定されることが明確に承認せられる。これが唯

心、史、觀、の、見、解、で、あ、る、。

五

國家意志は古代より發生し活動してゐる。しかしその威力には消長がある。一貫して見れば、國民歴史は國家意志によつて決定せられる。歴史決定は精神力により、物質力によるものでない。しかし國家威力が衰弱せるときは、これに代つて社會勢力が歴史進行の大勢を決定する。その限りに於て唯物史觀的歴史解釋を全く否定し去る譯に行かない。唯だ歴史觀を常に唯物的に固着せしめる所のマルキシズムの唯物史觀は大なる謬見である。否寧ろ國家威力は時代の消長あるにも拘らず、大體に於て漸次に強化されて行く。この點は日本の歴史、特に明治維新以後の史的發展に就て實證し得られる。

人類が自覺するによつて人間となり、人間の生活記録が歴史となる。人間は人間一般の汎人として、は自覺的存在であり、精神力の持主である。そこに學問・技術・藝術・宗教等が創造される。また世間生活に於ても、個人は自覺的存在であり、種々の團體もまた自覺的存在であり、國家も勿論自覺的存在である。かくて人間生活は擧げて自覺的存在のやうに見える。しかし唯一つ人間生活の中に無覺的存在が横はる。それは個人の關聯紐帶である社會であり、社會そのものは何の目的をも持たず、盲目的に運動する無覺的存在に止まつてゐる。唯だこの社會あるによつて、尙ほ、この社會が時に巨大なる勢力を揮つて國家威力を牽制し、國家意志の發動を抑制することによつて、國民の歴史が何の目

的を實現するにあるかゞ不明なる進行をなすことがある。この場合は、歴史の時代に於て決して稀でなくまた長く續くこともある。この時代に於ては歴史解釋が唯物史觀的とならざるを得ない。歴史生活の中にて自然性を帶ぶるものは社會勢力である。従つて國家威力が確つかりと社會を統制し社會勢力を制御し、これが永續するやうになれば、たとへ社會生活を解消せしめないでも、人間生活は擧げて意識的志向的の生活に化するのである。

唯心史觀を成立せしめる精神力は、人間一般の精神力でもなく、個人の精神力でもなく、階級の精神力でもなく、唯だ社會勢力を制御する國家威力のみである。こゝに唯心史觀が成立する。このことは、他の諸國に就ては暫らく問はないとして、我が國に於ては充分に尊重さるべき學問的見解となるのである。(終)